

史料室だより

題字デザイン 高岸 昇



感謝祭礼拝 フルダ・ザーナック来校 (1947年)

視野を広げ、思考を深めるための多様な講演

学園創立50周年を記念して発刊された『恵泉女学園五十年の歩み』第4章は「恵泉の教育」という題で、恵泉女学園の教育の特色の概要が列挙されています。項目の一つに「講演会」が挙げられていて、「講演会や見学が随時行われたことも、学園の大きな特長である。講演者も宗教面に偏らず、広い視野から各方面の先達が全校に語りかけるおりが多くもたれた。」と説明されています。「随時」とあることから、記念礼拝、記念日、研修会など予定されたプログラムで、予定された講師が講演してくださる行事だけでなく、河井先生を訪ねてこられる国内外からのお客様やお知り合いの、さまざまな分野の専門家の方々が来校される機会にお話を聴く、社会の動きに関連した話題を直ちに取上げて説明を伺うといった感じの機会もたびたび実施されていたのだと想像できます。

河井道先生は、「私の学校」＝「恵泉女学園」を創設するにあたって、当時一般的には良妻賢母育てが女子教育の中心的な目的であった時代に、信仰を持って神に愛される一人の人間としての自立心を持ち、同じく神の子である他の人々を思い、愛することができる人間として育つ「こころの学び」を豊かに与えようとされました。「家事はいつでも覚えられます。いま皆さんに必要なことはたくさん知識を得ること、そして世界に向かって目を開くことです」と諭され、但し「ほんの少し学問をしたから家事はできないというのは恥です」と女性としての心構えについての甘えをお教しにならない方でもありました。

世の中で起るさまざまな出来事について、どのような経過で起きたのか、なぜ起きたことなのか、どのように判断

したらよいかを自分で見聞きして調べ、自分で考え、判断して「イエス、ノーをはっきり言える女性になるように」「女性が世界情勢に関心を持つようになるまでは戦争は止まないだろう。だから少女の頃から国際―国際友好の心を養う勉強をさせたい」と願い、そのために学園での学びの中で、生徒たちが先駆的、創造的、挑戦的な生き方をしている方々、特に実践的なキリスト者の生き方の実例となるような方々と度々出会えるようにと望まれ、優れた実践者による講演会を大切にされていたのでしょうか。例えば、1947年は日本国憲法施行の年、施行直後の5月に新憲法実施記念礼拝を実施、増田甲子七運輸大臣が講演され、1948年にはエリザベス・ヴァイニング夫人、1952年には荒垣秀雄朝日新聞論説委員（演題「今日の社会情勢」）、1956年山室民子氏、1957年佐古純一郎氏など著名な専門家が来校されて、中学生、高校生のために講演されたことが記録に残っています。

実践に裏打ちされた教養は本物です。こうした各分野の専門家方が恵泉で学ぶ少女たちに本物の、生きた情報を提供してくださっていたことが分かります。

「小さい時こそ本物を」という言葉がありますが、まさに若い少女時代のやわらかい頭に本物の情報を与えられた恵泉の生徒たちは、恵まれた学びの時を持ったのだと思います。

広い分野のさまざまな講師の方をお招きして話を聴く、来訪者に情報をいただくという伝統は今日も教員方が受け継いで努めて実施するようにされています。

(学園長 松下俱子)

多様な講演—恵泉教育・ひとつの特色—

I 創立期～学制改革以前（1929—1946年度）

今回「史料室だより」では、「講演会」を取り上げる。重点は戦後の学制改革以後におくが、それ以前、学園の創立期・戦時下をも概観し、そのルーツを探っておきたい。手もとに「ケイセンニュース第三号」がある。「恵泉」誌創刊の5か月前、1932（昭7）年6月、生徒等の手によって発行されている。中に『『五月十四日ベルリンYMCA副主事ゲダード氏講演会』・題『自国の経験より叫ぶ平和』』という記事が載る。第一次世界大戦で敗れ、なお悲惨と窮乏の只中におかれているドイツから、世界の子供たちへの「平和の呼びかけ」であり、学園にとって、要旨の記載が残るはじめての「講演会」と思われる。

講演といっても、特別礼拝における外部からの講師によるメッセージも含まれる。高等部と留学生科では毎週の時間割に「講演」が組み込まれ、「国際的、時局的、衛生学的知識」は各々の専門家に教示を仰いでいる。一部に信和会や父母会主催の講演もある。

以上すべてを含めた講演会は創立から学制改革前まで18年間に180回弱、年平均10回を数える。大別すると、「キリスト教信仰」に関わるもの40余回。講師では賀川豊彦が最多で8回、内容は多岐にわたる。スマイザー、白戸八郎、村田四郎がつづき、矢内原忠雄らの名もみえる。「国際理解・平和」の分野は50数回。粕谷よし子、ボサンケット、レスターらによるイギリスの話など。新渡戸稲造の父母や生徒への語りかけもある。1930年代は太平洋戦争へと突き進む時期であるだけに、内山完造4回、清水安三3回、田川大吉郎2回の中国についての話はきわめて印象的であったと聞く。ジエスダーサン、マー・ヌエン・ダーらはインドやビルマの知見を広めた。

「社会・政治」の分野は30数回。病院や社会施設への奉仕活動の奨めから、婦人参政権や日本国憲法へとテーマは広がるが、戦時色濃厚な幾つかも含まれている。神山愛子、林歌子、小川正子、一又正雄、藤田たきなど多彩な顔ぶれである。「各専門分野」では中西悟堂、柳田國男、鷺山第三郎、香川綾子など枚挙にいとまがない。概観を通してそこには河井道の存在が感じられた。（西島黎）

II 新制中学発足～宇都宮信哉学園長退任まで（1947—1975年度）

「学園の出来事と社会情勢」「創立記念礼拝、河井道記念礼拝、教職員研修会」「特別礼拝や全校修養会」「講演会」の四項に分類し、年表を作成した。信和会が有志対象に行った講演会や、学年単位講演会は掲載せず、全校生徒対象の講演会に絞った。行事の名称は現在使用している名称を原則的に採用した。1950年代は生徒数の増加に伴い、短大・高校や中・高合同の講演会が減少し、中学、高校が別々に礼拝や講演会を持つようになった時期でもある。

「恵泉」誌の「学園日誌」欄から、日時、講演者名、演

題を一覧にし、所蔵史料で詳細を確認。講演者や演題が不明で年表から除外した講演もあり、今後記録を補完する必要がある。

河井道記念礼拝、創立記念式典、教職員研修会 植村環、酒



河井道記念礼拝 市川房枝 1974年

枝義旗、小崎道雄、久布白落
実ら河井道の知人と共に、
秋山絵美子、大塚野百合、
中村妙子、一色義子ら卒業
生が河井道記念礼拝講師を
務める。

創立記念式典には、30周年に矢内原忠雄、40周年に森有正。大木金次郎（青山学院）、鶴飼信成（ICU）、桑田秀延（フェリス）等キリスト教主義学校関係者や、北村徳太郎等、恵泉女学園理事長の名もある。古屋安雄は特別礼拝講師8回来校。創立10周年に始まった「教師修養会」では、島村亀鶴、小塩力等牧師が講師を務め「教員研修会」には永井道雄、江幡玲子、白井常ら、心理学、教育学の専門家が講師として名を連ねる。

特別礼拝、全校修養会 戦後まもない時期スマイザー、ザーナック、ブルンナーが来校し、ニコルソン、モット等の名が礼拝、講演会欄にある。これらの人々の平和メッセージは生徒達の心に深い感銘を与えた。1950年、短大英文科、園芸科が開学し、英語での講演の多くは短大生を対象とするようになった。由木康、浅野順一、東方信吉らは保護者であり、高橋三郎、十時英二ら卒業生伴侶の牧師も多々。福井二郎の講演10回は、清水二郎との交わりの深さを示す。益富鶯子（興望館）、大島功（日本聾話学校）、福井達雨（止揚学園）ら社会福祉分野の講師も多岐にわたり、献金送付先や各地での奉仕の業を、生徒達は礼拝を通して知った。礼拝以外の講演会 「最近の世界情勢」（伊藤昇）、「アラブ、イスラエル問題」（奥尾幸一）、「安全保障の問題」（田英夫）等ジャーナリストの話。憲法について鶴飼信成、中平健吉。立石哲夫、村山正美が南極観測の講演。糸川英夫は「宇宙科学の未来」について講演し、電子計算機等先端技術の専門家が講演している。小説家遠藤周作、庄司薫、随筆家池田潔、詩人高田敏子、三木卓も。金田一春彦が「日本語について」高校生に語り、大村はまは、「言葉を育てることは自分を育てること」と題して中学生に講演。読書、演劇、音楽、美術の講演もあり、「男女の交際について」（関屋綾子）等、マナーの話もある。性教育に関する講演は発達段階に即して学年単位で行われた。高木八尺、古坂つぎ、小平尚道等、河井道友人達は河井没後も恵泉女学園の教育を支援し、卒業生、保護者をはじめ学園関係者が講師として生徒達に語り続けている。講演の内容や感想が「恵泉」誌に掲載されているが、時代の息吹、生徒達の感性、講師達の熱意が伝わる。いずれ講演会同様、生徒に大きな印象を残した「芸術鑑賞」および恵泉会・同窓会の講演会等の年表を作成したい。

（松井弘子）

第5回「中学・高校の教育について聴く会」

日時：2013年7月5日（金）10時半～15時

場所：世田谷キャンパス2階会議室

講師：工藤隆・高橋愛子・梶原信夫・島崎英子・杉本教子
出席：松下俱子・加藤英明・本山早苗・服部伸江・加藤聡子・深谷佐紀子・松居正子・吉川克己・西島黎・松井弘子・土屋昌子・安藤和子（司会）森恵



1 はじめに一座談会の主旨と本稿の内容

史料室では来るべき百周年に向けて、学園で長く教鞭をとられた先生方のお話を伺い記録を作成している。学園として創立百年（2029年）についての構想は未だ未定であるが、準備は早くから始める必要があると考え、「中学・高校の教育について聴く会」を行ってきた。

5回目となる今回、お集まりいただいた先生方は、清水学園長から秋田学園長にかけて、学園が拡大した時代に歩んで来られた。この間の学園の歩みについては、当号の年表を参照いただき、本稿では当日伺ったお話をまとめる。

2 座談会の概要

開会祈祷、松下学園長の挨拶、資料確認、司会者による主旨説明が行われた。続いて先生方に在職中の出来事などについて話していただいた。昼食をはきんで、午後は質疑応答によって、出席者と歴史を共有した。会の終わりには加藤校長より現在の中高の様子が語られ、閉会祈祷で終了した。

3 在職中の出来事について

工藤隆：中学生の頃から通っていた教会には恵泉の生徒が

4人位いたので、恵泉の事はその頃から知っていた。大学卒業後、小学校教諭を経て、同じ教会の河合ハナ先生の紹介で採用面接を受けた。初めて恵泉に来た時、トイレの場所を生徒に尋ねたら、その場まで案内してくれた事に感心した。新築校舎の理科室では、1つの教室で実験する場と講義する場を分ける工夫をした、と佐藤恵子先生に説明を受けた。この形態は現在の校舎の理科教室にも取り入れた。教師としては、学年会に育てられたと思う。この学年という単位は大切なのではないか。

高橋愛子：清水先生と河合ハナ先生の招きで就職した。当初から留学を希望していたが、ミチ・カワイ・クリスチャンフェロシップの援助で2年間アズベリー神学校に学び、修士号を取得した。留学中はモリソン夫妻をはじめ、フェロシップメンバーのサポートで、西洋文化・国際感覚を身につける事ができた。帰国後清水、佐藤両先生の了解を得て、英会話クラスに分級を取り入れ、発音とリズムを個々に指導できるよう、テーブル付きの椅子を揃えた。学年ごとに教材を工夫し、寸劇・英詩暗誦・英作文を通し、将来仕事でも英語を使えるように指導した。

梶原信夫：姪が恵泉に入学し、寮への引越しを手伝って初めて恵泉を訪れた。勤め出した当時は宇都宮先生の他に松木信先生、高岸昇先生のみが男性だった。始めは担任も顧

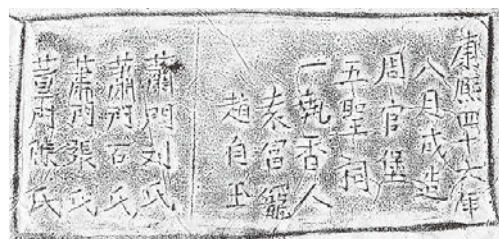
恵泉あれこれ (19)

多摩キャンパスの鐘

大学多摩キャンパスのバス停側ホールに置かれている大きな鐘は、その大きさが人目を引き、来学者からしばしば由来を尋ねられる。鐘の高さは約1m、幅60cm、重さ62.7kg。これを支える高さ160cmの木枠の台も立派なものである。恵泉女学園創立2年目、1930年に世田谷の現在地に移転して以来、放送設備が整うまで始業の合図に使われてきた鐘で、1935年12月3日付けの河井道紹介記事「女人映像」に「遼陽の鐘」と記されている。

鐘の表面に4つの部分に分かれて文字が記され、27名の人名と地名らしき記載がある。この文字を大学人間社会学部の楊志輝先生に読んでいただき、康熙46年（西暦1707年）に铸造された鐘であることがわかった。

中高教諭光行泰子先生に依頼して拓本をとっていただいた。この拓本の一部を学習院大学史学科の武内房司先生に見ていただいたところ、「周官堡」はよくある村レベ



ルの地名、「五聖祠」という講のような宗教組織が製作したもので、「会首」はこの組織のリーダーを示すということを教えていただいた。蕭門石氏という人名からは、蕭という一族に嫁いだ女性たちがこの宗教組織を支える信者であったことなどもうかがえるという。河井先生はこの女性たちの末裔と、どこかでつながりを持ったのであろうか。今後も調査を続けたい。

『スライディング・ドア』は1937年、上海のKwe-Hyng（クウェ・イン）宛に河井道が書いた手紙の引用で始まる。戦争のため投函されることのなかった手紙であるが、河井は中国各地に友人をもっていた。

（土屋昌子）

問もなく、自分から卓球部の顧問と視聴覚委員を引き受けた。秋田先生が「恵泉のこころ」を言語化したと思う。その一つに「自覚的関心集団」というのがある。自覚的に集団の一人として働く教員という事だが、心に残った。その後「校務分掌」が行われ、忙しくなった印象がある。現校舎の建築も時間割作りも好きな仕事だった。

島崎英子：戦中に経堂に疎開し、5歳上の姉が入学した。母は校舎建築のため、十円袋を持って近所を回り寄付を集めていた。礼拝で聞いた黒人霊歌、野村実先生の講演会などに感銘を受けた。28歳の時夫を亡くし、担任だった松木知子先生に相談したところ、教師への道が開かれた。信和会顧問としてはズボン解禁の話し合いなど、生徒が自主的に動いていたと思う。大規模地震に備え、防災グループ分

けをし、歩いて帰る訓練を実施した。英語では、ネイティブ教師の採用、ラボ教室の整備など「英語の恵泉」の名にふさわしい魅力ある英語教育の充実が図られた時代だった。杉本教子：大学で関根（小川）恵美子先生と同期。「体育がさかんではない母校の教師になりたい」という関根先生の熱意に感銘を受けた。大学在学中にダンス部のコーチをした。卒業後、幼児教育を経験、関根先生に1年遅れて恵泉で共に教える事となった。スキー教室、6年間一貫の多種目を取り入れたプログラムなど、生涯スポーツや競技の中での友達との関わり方を2人で考えた。体育嫌いの子に「体を動かす事は面白い」と言わせたいと思った。関根先生は退職されたが、生徒たちに生涯にわたり、体を動かす喜び、健康管理を学んでいって欲しいと思う。

河井先生をめぐる人々 (19)

みよし つとむ
三吉 務 (1878-1975)



「追追（おいおい）、新約聖書の書簡を講じたく思っていたが、その舞台をよく理解するためには、使徒行伝の研究が大切である。次に信仰は生ける事実である。これを解釈するのが神学である。しかも人は往々両者の区別を誤るのは残念である。神学は大切であるが、それよりも大切なのは信仰の事実である。」(説教「召天のキリスト」より)。三吉務牧師は講壇での説教を最も重要な責務と考え、毎日曜日の説教のために絶えず聖書に向かい、祈りと思索を重ね全精力を傾注した。信徒たちは礼拝に引き寄せられ、説教により養われる喜びをこよなく経験した。また彼の牧会は、福音の豊かな喜びより発し、求道者にも講壇より降りて握手を求め、温かな手のぬくもりを覚えている者は今なお多い。中国の古典にも通じ、深い教養を持った説教者、牧会者であった。

河井道は、三吉牧師の円熟期、長老として三吉を援け、三吉もまた河井を信頼し、乞われるまま恵泉女学園に赴いて子女の教育にも貢献した。

三吉務牧師は1878（明治11）年、高知県長岡郡新改村に生まれた。宣教師 T.C. ウィンによって導かれ1899年日本基督大阪南教会において牧師・鈴木寿一より受洗。1902年、明治学院神学部に入學。植村正久が東京神学社創立のため同校を去った時、中退し、教師試補となり福井、高槻などで牧会。ウィンの勧めで大連西広場教会の牧師となり、1年後アメリカのプリンストン神学大学などで学んだ。帰国後ウィン宣教師の満州伝道にも協力。植村正久没後（1925年）富士見町教会で1948年まで23年間、主任牧師として伝道、牧会の務めを全うした。

(小金井緑町教会初代牧師 山本圭一)

(写真出典 旧西広場の会編『三吉務牧師の面影』1976年発行)

4 質疑応答から

* 在職中最も印象深かった事は？

- 工藤：教員研修制度での学びを活かした事
- 高橋：毎日の礼拝、御言葉と讃美歌
- 梶原：関心のある数学史を独自に教えた事
- 島崎：中高一貫になった事
- 杉本：初めて担任したクラス

* 英語を学ぶには環境作りが大切だと思う。教室に入ったら英語の国の雰囲気があるようにと、掲示はすべて英語にした。ハロウィンなどの季節の行事・歌も有効。

* 恵泉教育を教科の中で実践した例として、創作ダンスのテーマを聖書から採った事がある。聖書の先生に何か所か選んでいただいて、生徒が決めた。すると生徒は自ら聖書を持ってきて、お祈りをして取り組んでいた。発表を見た聖書の先生は新しい感触で面白かったと言って下さった。

* 芸術鑑賞や講演会は昔からよくあって、いろいろなお客様が来校した。その中には、石井漠バレエ団の松島トモ子さん、声楽家の五十嵐喜芳さんなど、後年有名になった方も多い。高校は誰を呼ぶか、生徒が決めていた。

* 1964年、佐藤恵子先生が主事になって2年目くらいから、保護者を招いての学校行事が始まったと思う。まず、中2でクリスマス祝会を行った。その後中1で生活訓練の報告会を、中3は卒業感謝会をやるようになった。以上
(森 恵)

座談会の記録は史料室内で閲覧可能です。

運営委員長：松下俱子
運営委員：川戸れい子 服部伸江 西島黎
松井弘子 森 恵
室 員：土屋昌子 安藤和子

恵泉女学園史料室
〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-8-1
TEL・FAX 03-3303-6920 (直通)
メールアドレス ksshiryouto@keisen.ac.jp